

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	株式会社 キビラ		
氏名	岩村 湧香		
メジャー	市民社会・国際協力論	マイナー	アジア研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

「大切にすべきは好きなこと。使命感だけだと疲れてしまう。」

この文章を書くにあたって、高校時代に使っていた USB を机の引き出しの奥から引っ張り出して、受験の際に提出した課題レポートを読み返してみた。たしか、グローバル化の正負の側面を書くように指示されていたと思う。3つ例を挙げた中でいちばん最初に書いていたのが、大量生産・大量消費される安い洋服の裏側、搾取労働や児童労働、過剰生産による地球温暖化への影響についてだ。面接では、こうした児童労働や低賃金で強制労働させられている人たちを減らしたい、と言った記憶がある。一緒に提出した自己推薦書も読んでみると、高校3年生だったわたしはこうした社会問題を解決するための NGO や NPO の職員になりたかったらしい。

今こうして振り返ったら、

「うわっ。高3の自分、意識高いな～（笑）」と思う。同時に、

「すごい。」と感心してしまった。

この学部には、難民や移民の問題、ジェンダーについて、紛争地域の問題、少数民族について、などなどまだまだたくさんあると思いますが、様々なことを学んでいる人がいて、それぞれが「こんな世の中にしたいな。」と思い描きながら学生生活を送っているし、進路を決める人もいる。もちろん、高3のわたしに関心を寄せていた児童労働や搾取労働の問題に取り組んでいる人も。自分自身に対しては、上に書いたように「意識高いな～」と笑ってしまうけれど、これらの問題に真剣に取り組んでいる友人や後輩たちに対しては、「意識高いな～」なんて微塵も思っていないくて、本当にすごいと思っているし、尊敬している。

じゃあ、なんで今のわたしは高3のわたしに「意識高いな～」と笑ってしまうのか。

ひとことで言ってしまうえば、わたし自身がそれを実践することができなかったから。

服が好き。お気に入りの1着を着ればとても幸せな気分になれる。

でも、そのお気に入りの1着を作った人は幸せではないかもしれない。

今、日本で服を買おうとすると賃金の低い東南アジアの国々で縫製されたものばかりだ。そういった国々の人々は国際関係の構造上、搾取されやすい状況にある。そう考えだしたら、低賃金で働かされている可能性が高い服ばかりで新品は買えなくなった。服は好きだけど、想像が膨らみすぎてしまって約1年、何も買えなくなってしまった。でも、可愛いものがあつたら心はときめく。かといって生産背景を100%気にすると、着たい服がなくなってしまう。「どうすればいいの?」たくさん悩んだ。

悩んだ結果、基本的に古着と作り手の想いがわかるブランド、しかも本当に欲しいものを考え抜いて買うようになった。洋服を買うたびに脳みそをフル回転させたことがあるでしょうか。

長くなったけど、結局わたしは生産背景だけにフォーカスすることができずに諦めてしまった。でも、そのおかげで違う問題点にも気づくことができた。人々の消費の仕方に疑問を抱き、それについて卒業論文を書いた。生産国の人々に配慮したい気持ちも強いけれど、先進国のわたし達の服の消費の仕方は異常なのだ。需要が減れば、搾取もなくなるだろうと考えた。

大学4年生のわたしの就職先は一般企業だ。アパレル企業で婦人靴を販売する会社である。この会社に就職を決めたいちばんの理由が商品を「長く使ってもらえる」から。受験で書いた課題レポートの問題意識が強くなって、卒業論文ではファッションの商品選択と消費にまつわる問題点を洗い出し、その中で、洋服のライフタイムが短くなってきていることに気付いた。まだ着れるのに捨てられてしまう服があまりにも多い。就職先がメインで販売しているのがパターンオーダーの婦人靴で、靴擦れが起きやすいハイヒールを、個人の足に極力合わせた形で販売する。履きやすさが追求されているので、履きつぶしたから新しいものを買いにくるお客様も多い。寿命が来るまで使われるものを扱っているところに惹かれた。オーダーされた靴は国内の工場で作っている、というのがわかるのも良かった。宣伝みたいになってしまったけれど、わたしにとってはとても重要なことなのだ。

高3の時に思い描いた未来と今は、まったく違う形になったけれど4年間、大学でフェアトレードや政治経済について学んだことで、今の自分がいる。タイトルのように、使命感だけでは「好き」は続けられない。その「好き」がたくさんの社会問題を孕んでいたら、さらに苦しくなる。1つのことを自分ごととして考えて、普段買う服、靴、そして自分の仕事でもそれを大切にしたいかったので、今の進路を選んだ。本音は、生産背景の透明度をもっとあげていくための仕事も諦めきれないけど、それはキャリアを積んでからチャレンジしようと思う。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	進学準備		
進路先	未定（海外大学院）		
氏名	エバデ・ダン 愛琳		
メジャー	国際政治論	マイナー	中東・アフリカ研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「無力感の先」

わたしは進路がはっきりと定まらないまま卒業します。ただ、自分の中では、年をとった時に子どもに「わたしはあなたのために、地球環境をこれ以上悪化させないよう手を尽くした」といえる人間になりたいと思っています。そのための一つ目のステップとして、海外の大学院に進学する計画で準備を進めています。

そもそも進学先をFGSに決めたきっかけは、ネガティブなステレオタイプでしか表にでてこなかった自分のもう一つのふるさとナイジェリアを、そしてひろくアフリカ全体を深く知りたいという思いでした。進学前から、一方的な視点からしか語られていないストーリーを手放しに受け入れることに違和感を抱いていたわたしにはぴったりのカリキュラムがありました。上智大学は他学部の授業が比較的受けやすいというメリットがありますが、学部内でも複数の学問分野がある点でFGSはその最先端を行っていると思います。分野や地域を超えて、たくさんの「目」を養うことができる点では期待していたとおりました。

ただ、この「たくさんの『目』をもつこと」は案外楽なことではありませんでした。あるとき社会学の授業で、紛争後のコミュニティにおける復興プログラムの難しさを学び、強い憤りを感じたと思えば、すぐあとの国際関係論の授業でなんの疑念も抱かずに核兵器の話をしたりする。入学前は、何が正しくて、世界はどうあるべきか、なんとなくわかっていたような気がしていましたが、だんだんと自信がなくなっていきました。どんなに文献を読んでも、友人と議論をしても、いつも最後には「結局なにもできんやん」という無力感に支配されました。もちろん、無力感は成績にはつながりません。先生の言うことを理解してテストやレポートをこなしていけば成績はとれます。周りにはうまくそれを割り切って学習を進めていった友人や、あえて一つの見方に執着することで活発な議論をしていた友人なんかもいました。

あるときこの無力感でどうしようもなくなったことがありました。ルワンダの内戦についての映画をみる機会があったのですが、そこで登場した主人公の父親が思いがけず自分の父親に似ていました。映画を観る前からその内戦をめぐる政治的状況や国際社会のうごきについての授業を受けており、何人が死

傷してその後どうなったかも知っているつもりでした。ただそのビジュアルのイメージにあまりにも圧倒されてしまい、その先を観ることができませんでした。ちょっと学んだだけの理論を振りかざして、歴史の上っ面だけを触って知ったかぶっていた自分をひどく恥ずかしく思いました。

その後ある教授に「先生はいままでそう感じたことはありませんか」と聞いてみました。すると先生は「あるよ。でもそこで挫折したりそこから逃げたりするのは誰にだってできるけど、その先に進むために大学にきたんでしょ」とおっしゃいました。この瞬間がわたしの中での分岐点だったように思います。ここでの学びは高校生までのすぐに答えが出るようなそれとは違う。焦燥感や無力感から逃げて楽な答えに逃げたとしてもそこはただの虚構です。このころすでに FGS で学び始めてから 1 年半ほどが経過していました。

その後はその無力感の先に進めるようにと思い授業を受けたり課外活動をしたりしました。専攻を国際政治論に決めてからも、もう一つの領域である市民社会領域への、そして入学のきっかけとなったアフリカへの関心をもち続けようと、NGO で活動しました。そんなころ、2 年生の後半、そして 3 年生の時に受けた国際関係論領域の授業の中で、この分野において今後は環境問題の領域も重要度を増していくだろうという話を聞きました。環境問題への関心を、高校生のころに数学が苦手だという理由だけでキャリアの軸から外していたわたしにとっては、思いがけない再会となりました。ここでもまた、なぜ外交や軍事の問題と並べてこの領域に触れたのかと教授に伺いました。国際政治学や社会学の観点からも十分に環境問題領域に関わることができることに気付いてから、ゼミのレポートを通してどのようなアプローチができるのかを徹底的に調べました。そうすると自分の狭い視野が露呈しました。いわゆる理系の人にしか解決し得ない問題だと思っていたことが、いかに危険な間違いであったか。このころ、周りほとんど留学に行っており、残留組は就活の準備を始めていました。

思い返せば、進学という選択肢は無力感の先に進めと先生に言われたころから頭の片隅にあったような気がします。子どものころ、周りの大人はだいたい自営業で、スーツを着て働く人なんてほとんど知らなかったこともあり、「仕事」をするイメージがつかなかったのも一つあるでしょう。ただ、それ以上に国際政治、あるいは社会学の領域から環境問題を捉えるうえで、自分が何も知らなさすぎる、もっと学びたい、という思いが一番の決断要因でした。あえてここで言わせてもらおうと、上智大学は進学サポートがとても弱い大学です。海外の大学院への進学となると余計に弱くなります。ただ、一期生である私たちは、就活組も含めて先人がいないという点で、進学も就職も同じ不安を抱えていました。いずれにせよ、サポートが弱いので、ほとんど自分で準備をしています。それでも大学内で一番助けてくれたのは教授陣でした。先にも述べていますが、FGS の一番の強みは教授と学生の距離の近さにあると思います。何か疑問があればすぐに聞きに行ける、もっと知りたいと思えばその分だけアイデアをくださる先生たちがそろっています。早い時期にそこに気付けたわたしは、進学の疑問や不安も先生にぶつけました。どのように進学先を選ぶべきか、書類にはどのようなことを書くべきか、そして進学までの間何を準備すべきかもききました。

同時に、卒業論文の執筆もはじまりました。わたしにとっては、これが就活のようなものでした。進学先でやってみたい研究、そしてその後の進路も見据えて、いまどのようなことを学んでおくべきかを考え、時間をかけてテーマ設定し書き始めました。いずれ分かると思いますが、卒論は FGS での学びを通

して蓄えた知識とそれによって拡散した自分の関心を集約する作業です。単に事実を連ねるだけではレポートと変わらず、そこから何が分かるのか、クリエイティブに思考を巡らせる必要があります。始めは字数に圧倒されていましたが、そんなものは何の問題でもありません。とにかく、約1年間じっくり向き合ったこともあって、提出した時にはこの上ない達成感と自信が沸き上がりました。同時に、「これではまだ足りない」という感覚もありました。わたしにとって卒論は、FGSでの4年間の集大成であるとともに、これから先の人生の出発点でした。

こんな流れでわたしはいま大学院の準備をしています。海外に行くことを決めた理由はまた別のストーリーなので割愛しますが、私がどこから来たのか説明しなくてもいい場所で落ち着いて学問と向き合いたいというのが一番です。東京に行けば楽になる、と高校の恩師に言われるがままに上京したものの、やっぱりどこにいても「ハーフ」だとか「黒人」だとかという檻の中で好奇の目にさらされることには変わりはありませんでした。もちろん、海外に行けばそれがなくなるとは思っていません。それでも母国で自国民として受け入れてもらえないことよりはましだと思っています。いずれにせよ、卒業の時点ではっきりと進学先が決まっていない意味では不安ですが、どの道を通ることになってもあの無力感や焦燥感の先に何かを見つけるという意志には何の迷いもありません。

FGSを目指す皆さんへ、多角的でオープンな視野をもつことの大切さと、いい意味でその辛さを知り向き合う術を見つけることができる環境が整っているという点でこの学部は進学価値があると思います。在校生の皆さんは、教授をたくさん利用しましょう。たしかに圧倒的な知識量とスキルを前に委縮することもあります。それでも何かを学びたいという気持ちを優先してください。そうすれば応えてくれる方々ばかりです。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	その他（青年海外協力隊）		
進路先	その他（青年海外協力隊）		
氏名	大山 涼也		
メジャー	市民社会・国際協力論	マイナー	ヨーロッパ研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「きっかけの場」

私にとって、FGSでの4年間はとても充実していました。国際政治、市民社会、地域研究と1年次から様々な分野について幅広く学ぶことができ、2年次以降は自分が興味を持った分野に絞ってさらにその学びを深めることができました。勉学以外では、私は海外インターンシップを運営する学生団体に所属し、学生に海外での就業機会を提供するとともに、自分自身も6週間、台湾の小学校で教師として活動しました。

その後、2年の夏から1年間、大学の交換留学制度を利用してルクセンブルクに留学しました。もともと言語学に興味があった私は、社会言語学を学ぶためにルクセンブルク大学へ留学することを決めました。「言語が社会にどのように関わり、影響しているのか」という留学先での学びは、FGSの授業とはまた異なっていたこともあり、大変貴重な機会になりました。中でも、留学先での難民との出会いは私にとって自分の将来を考える大きな転機になりました。

それまで、授業やメディアを介して何度か耳にしたことのある「難民」という言葉は、私には正直無縁のことだと思っていました。もちろん、難民という人たちがどのような背景で難民とならざるをえなかったのかは授業を通して知っていました。けれども、やはりどこか遠い国の出来事のようにしか感じることはできませんでした。しかし、実際に会って話しをしてみると、私たちと何ら変わらない、むしろ過酷な状況にも関わらず勉強熱心で、強く生きている彼らの姿を目にすることができました。そのとき、私は「自分と彼らの立場が逆だったら、どうしただろうか」と想像せずにはいられませんでした。生まれた国が違っただけで、こんなにも人の人生の様子は異なるのかと絶えず考えていました。こうしたこともあり、帰国後は、日本へやってきた難民を支援するNPOでインターンをすることにしました。調べてみると、日本にもたくさんの難民（申請者含め）が暮らしていることを知りました。中でも、日本の難民に対する制度や認知度は先進国の中でも遅れており、改善されるべき点が多いことは確かです。それでも私にとって難民は、以前とは異なり、もう遠い国の出来事ではなくなっていました。

日本社会を含め、世界には未だに貧困や紛争、難民といった問題から、自身のセクシュアリティやエスニシティ、アイデンティティを孕む課題も多く存在します。FGSでの学びは、こうした課題に対して私たちの問題意識を育んでくれる“きっかけ”であると感じています。そのきっかけをさらに大きな関

心に結びつけるためには机上の勉強だけでは足りません。自分が興味のあることは、実際に自分の目で見て、耳で聞いて感じる事が大切だと思います。上智大学では多くのシンポジウムが開催されており、大学周辺には多くの国際機関やNPO/NGOの事務所があります。これほど様々な機会に恵まれている大学は珍しいと思います。また、私の周りにはLGBTIQや、移民、難民、ミックスやダブル（日本社会では一般にハーフと呼ばれる人のこと）の知り合いや友人もたくさんいます。いつの間にかその環境は私にとって居心地の良い「当たり前」になっていました。多様な価値観を持つ学生や教授と過ごす4年間はみなさんのきっかけを刺激してくれる場であると感じています。

最後に、私が専攻した「国際協力」という分野は漠然としていて、曖昧で、具体的にこれだと言える自信はありません。それでも、私は4年間を通じて勉強し経験したことを形にしたいと考え、卒業後は「青年海外協力隊」の一員になることを決意しました。なぜなら、一人でも多くの方が豊かに暮らしていける社会の実現に自らが活動して貢献したいと思い、その実践的な経験を積むことができると考えたからです。そして、2年後は大学院に進学する予定です。一般に言われる日本社会の「常識」や「流れ」から、私は大きく外れてしまっているかもしれませんが、自分のやりたいことを貫く自信もこの4年間で身につけることができました。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	株式会社 JTB		
氏名	岡崎 優美		
メジャー	国際政治論	マイナー	中東・アフリカ研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「FGS 一期生としての誇りをもって世界の舞台へ」

内定先を選んだ理由：

「世界中の人と人をつなぐような仕事をしたい」と、就職活動当初から考えていました。FGS という恵まれた環境で、多くの国で学び、様々な地域に関心を持つ仲間と過ごしたことで、「世界」、「グローバルな環境」、「国際貢献」、「英語」といったキーワードが自分の中の軸になったのは、ある意味必然であったように思います。

内定先である株式会社 JTB は、外国人観光客の誘致などを通じて、国際交流の促進や日本の発展に尽力しているだけでなく、日本企業の海外進出支援の事業等も行っているため、グローバルな仕事環境があると感じました。また、観光業を、途上国において、平和を創り出す産業に発展させる試みを JICA（国際協力機構）と協力してスタートさせており、民間でありながら、国際貢献に携わる事業展開がなされている点に魅力を感じました。また、若いうちに海外で働きたいという私自身の夢を叶えてくれるコース（2年目より数年間の駐在枠）で内定をいただいたため、2020年東京オリンピックの年に、世界のどこかから、日本へ多くの外国人の送り出しに取り組み、いち早く世界中の人をつなぐ舞台上で活躍したいと思います。

学生時代を振り返って：

FGS での4年間は、がむしゃらに学び、留学、研修、旅行含め、多くの国や地域を訪れた記憶が鮮明です。私は、元々アフリカなどの貧困問題への関心から、この学部を選びましたが、アフリカ地域について学ぼうちに、こうした地域への中国のプレゼンスの高さに驚かされ、圧倒されました。そうした背景から、中国の対外政策に関心を持つようになり、メジャーでは国際政治論領域、マイナーでは中東・アフリカ研究を専攻し、中国政治外交ゼミに所属して学んできました。

また、FGS で学んだことで、多くの出来事に対して、それは「なぜ」起こったのか、という疑問を抱くようになったことは、大きな成果の1つだと思います。既に当たり前と思えることに、「なぜ」を見出すのは、実はとても難しいことです。なぜ、中国は一党支配体制を維持できるのだろうか、なぜ、中国は発展途上国の援助に積極的なのだろうか、なぜ、一国二制度の下に置かれる香港で、雨傘運動規模の

大きな民主化要求運動が起こったのか。多くの疑問を抱くこと、そしてその答えを、あらゆる要因をふまえて分析、立証することの面白さを知った4年間でした。

**FGS** を目指す皆さんへ：

「自分の決断に自信を持って努力してほしい」、と思います。

高校生の皆さんが大学を選ぶ時、その中で学部を選ぶ時、自身の決断に迷いや不安を抱くこともあるかと思います。**FGS**1期生として1つだけ、皆さんにアドバイスできることがあるとしたら、**FGS**で学び始めてから、私は本当に勉強が好きになった、楽しいと感じるようになった、**FGS**はそんな魅力的な場所だということです。**FGS**には、まだ、**FGS**が発足する前に本学部の受験を決めた1期生の同志、学生と共に学部を盛り上げていこうと、私たちをいつも気にかけてくださる教授陣、裏方で**FGS**全体をサポートしてくださる事務の方々がいました。そんな場所で、自分の関心のある分野を学んできた4年間は、何にも代えがたい時間であったと思います。

今、**FGS**に何かのきっかけで興味を持ち、志望してくださっている皆さんの、その直感をどうか信じてほしいと思います。私は、**FGS**に入りたいと思った、あの時の自分の想いを忘れることはありません。

これまでの**FGS**を超える新しい**FGS**を創り上げていくであろう、未来の後輩の皆さんに、尊敬と期待の想いを込めて…。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	株式会社 東北新社		
氏名	岡田 有澄		
メジャー	市民社会・国際協力論	マイナー	アジア研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### ・内定先を選んだ理由：

私が現在の内定先を選んだ理由は、自分が興味を持つ映像やエンターテインメントにかかわることができる会社であるためです。もともと自分の経験、考えやアイデアを生かせる仕事、また、モノではないアプローチで人々の価値観に影響を与える仕事に就きたく、メディア業界を中心に就職活動をしていました。

### ・学生時代を振り返って：

私は、FGS 入学当初、国際問題としての紛争や貧困に特に興味を持っていましたが、一年生の秋学期に受けた基礎ゼミとサークル活動から受けた影響によって、その後、ほかの分野へも興味を持つようになりました。

まず、福武先生のクラスであった基礎ゼミでは、国際的なことを学ぶ学部だからこそ、逆に日本について学び、考える機会を持つために、「日本の境界」というテーマが掲げられました。この基礎ゼミを通して、社会学の面白さを感じるようになりました。

さらにサークル活動ではカンボジアへ教育支援をする活動をし、夏休みには実際に現地を訪れました。そもそも授業で国際支援について勉強するだけではなく、実際に自分でその現場に携わってみたいと思い、サークルに入ったのですが、実際にカンボジアを訪れると、それまでの私の価値観や学んできたことなどを打ち砕くほどの経験をしました。

現地に行かなければ見えてこない様々な現実を目にして様々な葛藤を抱いた経験は自分の人生の財産になったと思います。

そのようなサークル活動を通して私は、「教育」の分野へ興味を持つようになりました。カンボジアから帰国後、教育関係の書物を読んだり、教育関係の授業を受講したりしました。次第に教育学を通じて社会学をより勉強したいと考えるようになり、国際社会学ゼミに入りました。しかしゼミが始まった当初は、何を研究テーマにするかが定まらず、文献に当たっては自分の問題・関心を見極める作業を繰り返していました。三年生の学年末になりようやく研究テーマを決め、日本社会におけるコミュニティ研究、それに伴う日本人の帰属意識の推移について研究を進めることにしました。テーマを決めてからも知るべき時代背景や持つべき知識の多さに戸惑うことがありましたが、最終的に自分の知りたいと思っ

ていたことを突き詰める研究ができたことを嬉しく思います。

学生時代を振り返ると、FGS で学べることの幅広さによって、自分の関心をもつ分野が移り変わったとしてもその関心を突き詰めることができる環境があったことをとても有難く思います。逆に、関心が入学当初から一貫している人もその分野を極めることができる環境があります。つまり FGS では自分の学びたいこと、知りたいことをとことん追求することができるし、それを見守ってくれたり支えてくれたりする先生方がいると思います。FGS を目指す受験生の方も、入学後、自分の関心・好奇心があることを十分に学べる機会があることを楽しみに頑張ってください。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	大手新聞社		
氏名	A.K.		
メジャー	中東・アフリカ研究	マイナー	国際政治論
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「自分を深掘りした4年間」

内定先を選んだ理由：

1年間の交換留学を経て、日本社会の多様化の促進に貢献する仕事がしたいと強く思うようになり、グローバル戦略を掲げている新聞社を選びました。そもそも、多様性を大事だと思うようになったのには、自分の帰国子女としてのバックグラウンドが関係しています。父の転勤で英国から帰国後、「日本社会は異質なものを『負』とする傾向がある」と感じるが多々ありました。健全な財政・豊富な天然資源に恵まれていれば、そのままでも国の安定的な存続という意味ではそれほど支障はないのかもしれませんが。しかし、国内で少子高齢化が進みつつあり、同時に世界の幅広い地域において急速かつ予測不能な変化・厳しい競争がみられる現代にあって、それではイノベーションや柔軟性も育まれにくいのではないかと。留学先を含め、大学で勉強をすればするほど、危機感を抱くようになりました。そこで、日本が経済に留まらず持続的に豊かであるためには、「違う」ものも「よいもの」として受け入れられる土壌が必要なのではと思い至りました。様々な立場にある人々への取材と記事の発信を通して①もうすでに社会のなかで進んでいる多様化を見えやすくし、かつ②意識の多様化の促進を図りたいと思うようになったのです。

学生時代を振り返って：

FGSで3年と留学先で1年過ごした大学生活は、自分を深掘りする4年間となりました。これも、既存の思考の枠組みや価値基準に甘んじず、それらを問い続けるよう問題意識を常に刺激してくれた教員陣、そしてありのままの自分を受け入れてくれる友人がいたからこそ可能だったことです。特に、FGSで培った批判的思考力および物事の形成過程（複数の観点からの歴史の比較）を調べる習慣は、就活はもちろんのこと、今後社会に出てからも有益なスキルとして役立ってくれるだろうと感じています。「政治的・経済的・社会的に力のある人が言うからそう」なのではなくて、なぜ彼らの言動が一定数の人々に訴え、あるいは他の人々の反発を呼ぶのか。そもそも、その有力者が力を持つようになった経緯はどうか。このように考える訓練を積むことで、翻って自分が本当に大切にしたい価値は何なのか、それを守るためにはどうすべきなのか、ということが見えてくるように思います。そうすることで、物事

を絶対的に「善」あるいは「悪」と一方的に決めつけることなく、自分の価値判断もまたあくまで相対的なものなのだという謙虚な気持ちをもてるようになります。このバランス感覚をもつことで、自分の信念さえも、なるべく他者に押し付けることのないよう気を付けつつ実践していきやすくなるのではないかと考えています。

**FGS** を目指す皆さんに伝えたいこと：

大学生活の4年間は、短くもあり長くもあります。是非、学内外での時間が充実したものとなるよう、興味を持たれたことには色々チャレンジしてみてください。一つ一つのチャレンジが自分の可能性や選択肢を広げ、そのときは失敗にしか思えないことでさえも、いずれ自分を豊かにしてくれるものだったと気付くはずです。「自分にはできないかもしれない」と決めつけず、やってみてください。また、問題意識を共有していて、かつ自分が心から信頼・尊敬できる教員に1人でも出会えると、より学び深く実り多い大学生活になるように思います。まず自分の頭で考えてみて、それでも迷ったときに相談すると、必ず自分には見えていない選択肢を提示してくれるでしょう。

「世界」というグローバルな視野を持つことは大切なのですが、やはり自分のルーツ（出身地・出身国・親の出身国など）も同時に大事にするよう心掛けてみてください。自分にゆかりのある場所・地域・社会のどこが好きで、何が問題点だと思うのかを、その歴史を学ぶなかで考えておくと、実際に他国の方と交流する際に自身の意見として述べることができます。そういった適度なバランス感覚を持った人こそが国際的な舞台でも一目を置かれ、通用する人材なのではないかと思います。そもそも自分のアイデンティティがどこにあるのかまだ明確でない人も、この4年間で是非大いに模索してみてください。様々なことを考えるなかで自分の価値基準なり信念なりが形成されていくうちに、見つかるはずですよ。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	株式会社 JFE 商事		
氏名	黒須 政子		
メジャー	市民社会・国際協力論	マイナー	中東・アフリカ研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

内定先を選んだ理由：

自身が持つ潜在能力をビジネスにおいて発揮したいとおもって私は商社業界を目指しました。将来はグローバルに活躍したい、そして忍耐強く自身のポテンシャルを上げ続け、海外経験で得た適応能力を活かし、常に新しい分野に挑戦してしたい、そんな環境に自分をおきたいと思って JFE 商事の総合職を選びました。私の内定先は鉄を専門としている商社になります。鉄鋼専門商社というと女性が少なく、なかなか女性が働くには適していない環境だと思われがちですが、私の内定先は業界の中でも一番に女性の活躍を支援している点も就職先として選んだ決め手となりました。「内面も評価される自立した女性」になるのが夢で、女性の総合職の活躍推進に取り組んでいる JFE 商事で将来はグローバルに活躍し、女性の社会進出をエンパワーする存在になるためにも、成長が現実的な環境に身を置き自身が持つ潜在能力を、ビジネスを通して発揮出来ると感じました。女性の社会進出が奨励されつつ実際には難しい現代なので、女性を勇気づけ、引っ張られる存在であり、内面をも認められるような存在を目指している自分にとってはベストだと感じ、JFE 商事を選びました。

学生時代を振り返って：

私が FGS に入って一番良かったとおもうのは、学びの多様性です。何を専攻するかも広範囲で選べ、多角的な視野を持てることは自信を持って言えます。私は市民社会・国際協力論をメジャーとして選んだため、後進国の支援諸々を学びましたが、その中でも教育に関心が強かったためゼミ（演習）では国際教育開発論を学習しました。分野としては発展途上国の教育課題に特化して研究しました。そして、語学にも関心があったため4年間スペイン語を学び上級レベルに達することも出来、マイナーで中東・アフリカ地域研究もしていたため、高校まであまり触れられない地域について深く学ぶことが出来、新たな価値観や情報を入手することが出来ました。このように、興味分野が広い人には FGS はとってもおすすめですし、グローバル意識を持っている人にはぴったりだと思います。

FGS を目指す皆さんに伝えたいこと：

私は FGS に入って個性豊かな仲間、たくさんの優秀な学生に出会うことが出来、この4年間で色々な意味で自分の成長がはかることが出来ました。好奇心旺盛で挑戦することが大好きな人、そして将来グ

ローバルに活躍したいと思う人にはぜひFGSに来て欲しいです！FGSに入ったら間違いなく楽しい大学生  
活を送れます、頑張ってください！応援しています。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	株式会社 朝日新聞社		
氏名	澤上 あゆみ		
メジャー	中東・アフリカ研究	マイナー	国際政治論
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「知りたい」に応える学部

内定先を選んだ理由：

学部で人類学を学んだことがきっかけとなり、あらゆる物事を対象として現場へ赴くことができる仕事に就きたいと考え新聞記者を目指すこととなった。また、目にした事実を自分の言葉で表現して社会に影響を与えられるという点でも記者職に魅力を感じた。今後、FGSで培った多角的な洞察力も生かせるのではないかと考えている。

学生時代を振り返って：

私は高校で日本史を受験科目に選択したため世界史の分野に疎かった。そこで大学では様々な文化や国際情勢をゼロから学びたいと考えていた。特に未知の領域であったイスラムに興味をもち、中東地域の国名やイスラムの教義といった基礎知識から固め、徐々に専門性を深めていった。

学部で得た最も大きな学びは、固定観念からの脱却だった。今まで当たり前だと思っていたことが、世界的に見れば異質なものになり得ると知り、自身の考えは多様な価値観の中の一つに過ぎないという気付きを得た。FGSで学ぶ内容は、国際政治のように現在進行形の事象だからこそ、問いに対する明確な正解が存在しないものもある。そのため自主的に学び、自分なりの答えを見つけ出すという思考の訓練にもなった。

FGSを目指す皆さんに伝えたいこと：

FGSは「何を、どのような視点で研究するのか」を自分で選ぶ学部です。自身の興味関心や意欲次第で、あらゆる分野の一般教養から専門的知識まで広く学ぶことができます。勿論、入学前に具体的なビジョンがなくても様々な講義を受ける中でゆっくり専攻を決めることができます。ただ漠然と大学に通うのではなく、皆さんの「知りたい」という気持ちを大切に、一生モノの知識を身に付けてほしいです。FGSにはそんな学生に応じてくれる教授方が沢山います。頑張ってください。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	ニチレイロジグループ		
氏名	花田 桃子		
メジャー	中東・アフリカ研究	マイナー	国際政治論
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「ぶれない軸」

内定先を選んだ理由：

インフラに携わること、様々な人と関わりながら成長できること、点をつないで付加価値をつけることの3つを軸に就職活動を行い、この会社であればそれが達成できると考えたからです。

学生時代を振り返って・FGSを目指す皆さんに伝えたいこと：

総合グローバル学部の学びを通して得られたものは、ぶれない軸と高め合え、認め合える友人たちです。

私は高校生の時に読んだ「職業は武装解除」という図書がきっかけでアフリカにおける平和構築と武装解除に興味を持ち FGS に入学しました。興味があった国際開発や国際協力の講義を履修する中で、NGO や市民団体を取り巻く政治体制に興味を持つようになり、国際政治をマイナーに据え、最終的に南スーダンの国家建設における成功と失敗というテーマで卒業論文を執筆しました。一見すると入学当初の軸がぶれているように感じるかもしれませんが。私自身も論文執筆中、軸を見失いまったく筆が進まないことがありました。テーマを変更することも考えていた時、担当教授から「あなたはしっかり学んできたからこのテーマにたどり着いたんだよ、軸そのものは全くぶれていないじゃない。」という言葉をかけていただきました。この言葉で火が付き、やっとの思いで書き上げた卒業論文を推敲していた時、FGS を志望していた高校生のころに書いた志望理由書と重なる部分を見つけ、4年間無駄だったことは一つもなく学びはすべて繋がっていたんだと実感できた瞬間でした。様々な分野を学びながら自分の軸を強固なものにすることができたと思っています。

また、この軸を確立するにあたって学部の友人たちの存在はなくてはならないものでした。時に議論し、時に教えあいながらそれぞれが学んでいることを共有することで新たな発見が多く生まれました。私は胸を張って、大学での学びが一番楽しく有意義なものだったとすることができます。それは常に刺激し合える仲間がいたからだと思っています。

私が過ごした大学4年間は、高校時代に期待し憧れていた大学生活そのものでした。FGS には、今抱えている夢や目標を現実化できる環境があります。相談し高めあえる友人、温かい教授から多くのこと

を学べる4年間で待っていることを約束します。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	進学		
進路先	Brigham Young University (アメリカ)		
氏名	ホールドストック 絵里花		
メジャー	国際関係論	マイナー	北米地域研究
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「自由と責任」

大学に入ると驚くほどの自由が手に入ります。地方の田舎の学校に通っていた私にとって、東京という土地で自己管理能力をさらに身に着けるのは非常に重要なことでした。生活面だけでなく、総合グローバル学部は自分の興味関心をもとに自由に研究をできるようなプログラムになっている分、自由が多いです。1つの学部の中に、いろんな地域研究の先生方がいらっしゃるだけでなく、いろんな政治的意見を持つ先生方もいらっしゃるため、いつでも一度中立な立場に立って考えることができます。

自分の場合、自分の選択には責任が伴うということ意識しながら四年間過ごしました。上にも述べたように、大学生には自由があります。私はそれを「責任」ととらえ、インターン、社会活動、ボランティアやアカデミックプログラムなどありとあらゆることにチャレンジしました。最初のオリエンテーションの時に学科長がおっしゃったとおり、私は上智大学が提供するすべてのサービスを使いきった自信があります。

いろんな経験をすることで、授業がさらに面白くなったり、自分の進路方向も定めることができました。私の場合、北米地域を研究対象としていたこともあり、毎年貯金してアメリカにフィールドワークに行っていました。毎年行くたびに興味が少しずつ変わっていき、その中で将来したいことを見つけました。しかし実現するためには、アメリカの大学に行かなければならないと考えたため、そこから受験闘争期が始まりました。その期間に実感したことは、FGS でしっかり身に着けたことを社会に出た時をもっていくことの心強さでした。自由を十分に利用し、責任をもって選んだものは必ず皆さんの財産になると思います。そして、FGS にはそれを提供する体制が十分にあるということを知っています。

## 総合グローバル学部 進路 卒業生の声

進路区分	就職（企業）		
進路先	三菱 UFJ 信託銀行株式会社		
氏名	M.M.		
メジャー	アジア研究	マイナー	市民社会・国際協力論
入学	2014年4月	卒業	2018年3月

### 「FGS と自分の関心」

内定先を選んだ理由：

働かされている社員の方々の雰囲気が自分に合っていると思ったからです。また、私は社会人になっても成長したいという想いがあったので、1人の信託銀行員としてだけではなく、1人の人間としても成長できる会社だと確信したからです。業務に関しては、海外と繋がる機会もあり、今後期待されるグローバルな人材として貢献したいと思いました。

学生時代を振り返って：

私は FGS で、メジャーである地域研究、特にアジアについて多く学んできました。高校までの世界史とは違い、地域を絞り、歴史に加えて、文化や宗教、遺跡などとさらに幅広く、さらに深い内容を学ぶことができました。

メジャー・マイナーの選択があることで、うまく組み合わせながら学べたことが良かったと思います。私の場合で言うと、アジア以外の自分が選択しなかった地域に関して、市民社会・国際協力論の領域の中で学ぶ機会もあり、自分が選んだ地域との類似点や相違点を見つけることができました。また、マイナーの領域でアジアに関して学ぶことも多く、お互いの領域に良い効果を与えていたと思います。

また、私は3年生の時、大学の実践型プログラム「カンボジア・エクスポージャーツアー」に参加しました。現地での遺跡訪問や子どもたちとの交流、家庭訪問などの活動を通して、自分自身の関心がどこにあるのかを考えるととても良い機会になりました。その関心から「カンボジアと観光業」というテーマで卒論につなげることができ、参加して良かったと強く思いました。

FGS を目指す皆さんに伝えたいこと：

FGS はまだまだ創設されたばかりの学部であり、学生と先生方が試行錯誤しながら進んでいるからこそ、色んな事に挑戦できる学部なのではないかと思います。メジャー、マイナーと選択することで2つの領域に特化して学ぶことができるのは、FGS の特徴とも言えます。2つの領域を選ぶのを迷うかもしれませんが、大学1年生で「東南アジア研究概説」や「市民社会論概説」、「アフリカ研究概説」などとそれぞれの大枠を学ぶ授業が用意されており、これらを受けていく中で自分が関心のある領域に気付くと思

います。それは大学入学前から関心を持っていることかもしれませんし、授業を受けて関心を持ち始めたことかもしれません。自分の興味や関心がどこで刺激されるかは分からないので、そこで大学という環境を最大限に活かしてほしいです。例えば、大学内で行われている、国際協力や国際政治などに関するセミナーに参加することや、海外に行く機会がたくさん用意されている上智大学であるからこそ、海外での留学や短期のプログラムなどに積極的に参加することもとても良いと思います。社会が「グローバル」とたくさん謳っている中で、大学4年間を総合グローバル学部の一員として、学んでくれたら嬉しいです。